

to 不定詞

1 次の英語を訳しなさい。

(1) Four years ago, at the London Games, South African sprinter Oscar Pistorius made history by becoming the first athlete with prosthetic legs to compete in the Olympics

---

---

---

(2) Jarryd Wallace, the reigning U.S. Champion in 100 meters who visited Japan last month to attend the opening of the Shin-Toyosu stadium and to test Xiborg blades, said he is not interested in joining non-disabled sports.

---

---

---

(3) Guttmann, who set up a spinal cord injury unit at Stoke Mandeville Hospital in the U.K. after the war, believed that sports would be a great way for injured soldiers to regain not only their physical strength, but also their self-respect.

---

---

---

(4) Japan, which has participated in the Paralympics since the second event was held in Tokyo in 1964, has struggled to keep up with changes in the Paralympic environment.

---

---

---

(5) In fact, Rome Mayor Virginia Raggi in September killed off her city's bid to host the 2024 Summer Games, citing financial concerns.

---

---

2 次の文の下線部を英語にしましょう。

0. 01秒を変えた「神の手」 (1/1)

公式の競泳用50メートルプールは、実際は50メートルではない。50メートル2センチだ。選手が到達したことを感知する厚さ1センチのタッチ板（自動計時装置）がプールの両端に取り付けられているからだ。この2センチが、ときに「誤審」というドラマを演出する。

2008年の北京五輪大会9日目。水泳競技の注目は、「水の怪物」こと23歳のマイケル・フェルプス（米国）が男子100メートルのバタフライで大会史上タイとなる7冠を達成するか否かに絞られていた。フェルプスは、身長193センチ、足のサイズ35センチ、両手を広げたときの長さは2メートルを超えるという恵まれた体を生かし、会場となった「水立方」（国家水泳センター）で一人だけ異次元の泳ぎを見せていた。

だが、100メートルバタフライは強力なライバルが出そろったことや、蓄積された疲労を考えると、フェルプスにとって最大の山場になるだろうと予想されていた。優勝候補の最右翼は、準決勝で余力を残した泳ぎでフェルプスの世界記録を更新したセルビアのミロラド・カピッチだった。

前半型のカピッチは、スタートから飛び出した。フェルプスはやはり疲労で体が重いのか、ターン時、目標にしていた24秒を切ることができず、カピッチから0秒62遅れの7位で折り返した。カピッチとの差は、およそ体半分ほどもあった。

タッチ板が登場する前、競泳のゴール付近はまさに戦場だった。水しぶきや波に惑わされぬようタッチを視認し、その上、順位を決めなければならない。ゴール時、プールサイドは二重三重となって水の中をのぞき込む審判員たちでごった返していた。

タッチ板はそれらの問題を解決したが、新たな難題が浮上した。高さ約1メートルのタッチ板は1レーンごとに設置されており、手の圧力がかかることで記録を計測する。当然のことながら、その大部分は水面下だ。そのため大小の水圧が常にかかっている状態にある。それらと人の手の圧力を見分けられるよう、メーカーごとに差はあるが、今では1平方センチあたりおよそ500グラムから2キロの圧力を受けた場合のみセンサーが作動するよう調整されている。そこに辿り着くまでには紆余曲折があった。

1990年の日本水泳選手権大会の女子50メートル自由形決勝でこんな事件があった。優勝者と2位のタッチのタイミングをスロービデオで確認すると、明らかに2位の選手の方が先着しているのだ。明暗を分けたのはタッチの強弱だった。2位の選手のタッチはストロークがちょうど終わるところで、なでるような形になった。このことを水泳用語では「タッチが流れる」という。タッチ板が押されてからタイムを計測するまでの反応速度は平均で0.04秒ほどだが、タッチの強弱で0.01秒単位だがわずかな差が生じるのだ。

92年のバルセロナ五輪の男子100メートル自由形決勝でも、2位が大混戦となり、そのうちの1人、グスタボ・ボルゲス（ブラジル）のタイムが掲示板に表示されないとい

うハプニングが起きた。タッチが優し過ぎてセンサーが感知できなかったのだ。そういう事態も想定し、大きなレースではバックアップ設備としてビデオ撮影をしている。その再生映像で詳細なタイムを割り出し、ポルゲスは2位に入った。テクノロジーの陥穽にはまり、そのテクノロジーによって救われたわけだ。

「水の怪物」が本領を発揮したのは、25メートルを過ぎてからだった。後半に強いフェルブスは、猛烈な追い上げを見せた。

しかし、カピッチの優位は変わらない。カピッチが最後のひとかきを終え、ゴールまで腕を伸ばしたとき、まだ見た目にははっきりとフェルブスの先を行っていた。勝負あったかに思えた。ところが、その残り20センチほどの距離で奇跡が起きた。カピッチは、そのまま伸びてタッチ。フェルブスは最後、中途半端な距離を残してしまったため、小さくもうひとかきし、水しぶきを上げながら水上のタッチ板を叩いた。

カピッチが先着したように見えた。当のフェルブスも言う。「最後、ひとかきしなければならなかったときは負けたと思った」。

が、そのひとかきが後に「神の手」と呼ばれることになる。電光掲示板を見上げると、フェルブスの名前の横に金メダルを意味する「1」の数字が浮かび上がった。タイムはフェルブスが50秒58、カピッチは50秒59だった。タイム差は、わずか0.01秒。距離に換算すれば、約1.98センチである。場内がどよめき、それまでは勝っても表情を変えなかったフェルブスが何度も水を叩いて、雄叫びを上げた。

収まらないのは、勝利を確信していたカピッチの方だ。陣営はタッチ板が誤作動したのではないかと猛抗議する。国際水運は何度もスロービデオを確認したが、結果は覆らなかった。かつての名選手で、五輪で金メダルを計4つ獲得したアレクサンドル・ポポフはこうコメントしている。「カピッチは柔らかくタッチするミスを犯し、フェルブスはハードにたたいた」（08年8月17日「日刊スポーツ」）

タッチ板は強く押し込まなければならないというのは、競技者ならば、誰もが叩き込まれている常識である。フェルブスの方が強く叩いたぶん、センサーの反応が早く、そこで0コマ数秒、逆転した可能性は十分にある。

いずれにせよ、このレースは2人の間に禍根を残した。同大会の公式タイムを担当したオメガが、フェルブスのスポンサーでもあったことが疑惑を深め、カピッチは「もう一度泳いでも俺が勝つ」と、敗北を認めようとしなかった。

そして翌年、イタリアのローマで開催された世界水泳選手権大会の男子100メートルバタフライ決勝で、2人は再び相まみえる。選手が入場してくるとコースが隣同士だった2人は、スタート台に立つ前にゴーグル越しにしばらくの間、にらみ合った。

レースは、カピッチがまたしても飛び出す展開となった。終盤、フェルブスが一気に差を縮めてくる。そして最後の5メートルで、フェルブスは頭ひとつ分、抜け出した。怪物はやはり怪物だった。

フェルブスはバタフライ史上、初めて五十秒の壁を破る49秒82をマーク。2位のカ

ピッチも49秒95と50秒を切ったが、今度こそ誰の目にも明らかなフェルブスの勝利だった。冷静な男が「こんなに燃え上がったことはない」と、再び吠えた。

どちらが強いかは明白だった。「水の怪物」は、自らの力で1年前の誤審騒動に決着をつけた。

センチ		準決勝	
メートル		レーン	
タイ		キロ	
ライバル		確認する	

3 次の英文を読んで、理解したことを3点書きましょう。

Study: Nearly a Third of World Overweight (「肥満問題」) ( 1/2 )

A new study finds one third of the world's population is overweight or considered **obese**. Since 1980, obesity rates in children and adults have doubled in 73 countries. And rates are increasing in many other countries, according to a report released on Monday, June 12, 2017. The report was published in the *New England Journal of Medicine*.

According to the report, obesity is increasing faster in children than adults in many nations, including Algeria, Turkey, and Jordan. But the world's weight problem is growing in both rich and poor countries alike. An increasing number of people are dying of related health problems, called "**disturbing** global public health crisis." The study claims that about four million people died of **cardiovascular** disease, diabetes, cancer, and other diseases linked to excess weight in 2015. "People who **shrug** off weight gain do so at their own risk," said Christopher Murray, one of the writers of the research paper.

Researchers studied health information from 1980 through 2015. They examined obesity rates, average weight gain, and the cause of death in 195 countries. They found that obesity rates are three times greater among youth and young adults in countries like China, Brazil, and India. Almost 108 million children and more than 600 million adults were found to be obese. Together, that represents about 10 percent of the world's population. Among the top 20 most populous countries in 2015, Egypt had the highest number of **age-standardized** obese adults. Vietnam had the least. In the same year, the United States had the highest number of obese children, and Bangladesh had the least.

(1) \_\_\_\_\_

(2) \_\_\_\_\_

(3) \_\_\_\_\_